

検証

防潮堤計画

気仙沼

②

「思っていたよりも高い。高台にいても海が見えなくなる」。本吉町の大谷漁港近くに作業所を再建した年配女性は、堤防高を示す看板を見上げながらため息を漏らした。

この海岸には、海抜9・8メートルのコンクリート堤防が計画されている。看板は住民説明会での要望を受け、海岸管理者の気仙沼土木事務所が

鉄パイプを組んで設置した。高台なので地面からの高さは約3メートルだが、海面近くから見上げると3階建てのビルに相当する。背後に市道があるため、堤防は海側に大きくせり出して整備することで、フノリやマツモが採れた岩場は堤防の下に埋もれてしまうという。

海辺の風景を一変させ、浜の豊かな恵みを奪う堤防だが、津波シミュレーションでは、東日本大震災級の最大クラスの津波に対する減災効果は、他の地区に比べて少ないことが判明した。市全体では2割減災できるのに、大谷地区は東日本大震災の浸水域と

災害危険区域はほぼ重なっている。リアス式海岸特有の入り組んだ地形と

高さへの疑問拭えず

大谷地区 堤防整備 説明不足で進まぬ理解

害で済み、修復して家族5人で生活している。新しい堤防ができれば、浸水面積が減るものと思っていた。しかし、津波シミュレーションで1

り、廃墟になってしまつ」と高橋さんは心配する。新しい堤防も整備するのになぜ、実際の津波よりもシミュレーションの方が高くなるのか分かった集落に被害はな

天然の岸壁によって、明治三陸津波の浸水被害が比較的少なかった地域でもあり、堤防計画へ疑問を抱く住民は多い。

「2メートル浸水するといふ結果が出たため、居住が制限される災害危険区域に指定されることになった。ほかにも修復して残った家があり、地域は騒然となった。津波対策を施して市長が認定した家は建築できるが、「鉄骨3階建ての家を建てて住むというのは現実的に難しい。どんな人がいなくな

らず、納得できる説明もない。これでは住民の権利の侵害だ」。住民説明会に何度も足を運んだが、疑問は解消されないままだという。

大谷地区は明治三陸地震で約5メートルの津波に襲われたため、当時の大谷村が高台に敷地を造成して集

震災より 高い浸水高

国道45号沿いに民家が建ち並ぶ大谷東地区で先祖代々暮らしてきた高橋和志さん(55)。自宅は50センチほどの津波浸水被

新たな被害 を呼ぶ例も

大谷地区は明治三陸地震で約5メートルの津波に襲われたため、当時の大谷村が高台に敷地を造成して集

守るものは

「思っていたよりも高い。高台にいても海が見えなくなる」。本吉町の大谷漁港近くに作業所を再建した年配女性は、堤防高を示す看板を見上げながらため息を漏らした。

天然の岸壁によって、明治三陸津波の浸水被害が比較的少なかった地域でもあり、堤防計画へ疑問を抱く住民は多い。

「2メートル浸水するといふ結果が出たため、居住が制限される災害危険区域に指定されることになった。ほかにも修復して残った家があり、地域は騒然となった。津波対策を施して市長が認定した家は建築できるが、「鉄骨3階建ての家を建てて住むというのは現実的に難しい。どんな人がいなくな

大谷地区は明治三陸地震で約5メートルの津波に襲われたため、当時の大谷村が高台に敷地を造成して集

2012年7月8日付

「三陸新報」1面

①

を生かし、新たに築いたのが、高橋さんたちが暮らす国道沿いの集落なのだ。こつした過去の経験から、明治三陸級の津波に備えて新たに整備する堤防が、実際の明治三陸津波より5メートルほど高くなることへの疑問が生じた。

高台集落に住む人たちにとっては、東日本級の津波を防げず、明治三陸級の津波には高すぎる堤防高が、巨額の税金で自然を壊してまで整備する必要が分からないのだ。

三陸新報社の取材に対し、行政の答えは明確だった。県河川課によると、明治時代は堤防がな

かっただけ、津波の流れを妨げるものもなかった。しかし、堤防整備によって津波の流れが変わり、ぶつかったり、せり上がったたりすることで、同じ規模の津波でも被害が集中する場所があるのだという。つまり、人が造る堤防によって、「過去に津波被害を受けなかったのに浸水し、被害が大きくなる地域が出る可能性がある」ということになる。

こつした現象は唐桑半島、気仙沼内湾でも確認できた。明治三陸津波の痕跡が2・8メートルだった気仙沼内湾には、5・7・2メートルの堤防が計画されている。

こつした現象は唐桑半島、気仙沼内湾でも確認できた。明治三陸津波の痕跡が2・8メートルだった気仙沼内湾には、5・7・2メートルの堤防が計画されている。

こつした現象は唐桑半島、気仙沼内湾でも確認できた。明治三陸津波の痕跡が2・8メートルだった気仙沼内湾には、5・7・2メートルの堤防が計画されている。

こつした現象は唐桑半島、気仙沼内湾でも確認できた。明治三陸津波の痕跡が2・8メートルだった気仙沼内湾には、5・7・2メートルの堤防が計画されている。



計画堤防高T、P9・8を示す看板
(大谷地区)

2012年7月8日付「三陸新報」1面②